都忘れ

小林宏子

私の一番好きな花は、「都忘れ」である。

この花の名は、鎌倉時代の一二一二年に起きた、承久の乱で討幕を企てた後鳥羽上皇が北条氏率いる幕府軍に敗北し、息子である順徳天皇が佐渡に島流しにされたおり、庭に可愛らしくさりげなく人の心に語りかけるようにひっそりと咲いている小さな花を見つけ、都への思いを忘れようと「いかにして契りおきけむ白菊を都忘れと名づくるも憂(う)し」と短歌を詠んだことが由来とされている。

花言葉は「私を忘れないで」であり、古(いにしえ)の昔から人の心を癒してきた日本を代表する花のひとつである。

無言で人の心に入ってくる花の心意気は憎いばかりである。

四十歳になった頃、兄が私に「お前は花屋が向いているかもしれない」とアドバイスをくれた。文学を愛した兄の強い影響を受け、また、兄を尊敬していた私は、その言葉が腹に落ち花屋になろうと直ぐ決心ができた。

それから一度も迷うことはなかった。

花屋になるため、東京以北最大の花屋明道春風園で修行をさせてもらった。

修行での最初の仕事は、花の水揚げであり、トラック二台分に積まれた花は作業台に乗せられると前が見えないくらい山になった。

その時間、先輩たちは食事に行き、誰もいない作業場で気楽に黙々と一人で花たちを活かす技を磨くことができた。

花の生命力は凄い、畑で摘まれた花は専門用語で「半殺し」の状態で小売店に届く、その花の茎をハサミで切り、熱湯で煮て冷たい水に放り込み、瞬間的に爆発させ蘇らせる。

そして、一晩中水につけ更に活力を与え、翌朝に元気になった花を店頭に美しく並べて、お客様を待つ。

花屋の修行で、花の一日の「いのち」と人の十年の「いのち」は同じだと教わった。

花屋の仕事は、この短い「いのち」を日本の季節おりおりの抒情的な行事を先取りしてお客様にお届けする。

お正月は松竹梅、そして、真っ白い雪の妖精たちが舞い降りる中、桜や桃が登場し、間もなく母の日のカーネーションがやってくる。

この仕事は、一本の花の「美」を誕生させるために沢山のゴミと身体の冷えとの闘いであると思う。

昭和の終わり、日本経済に陰りが見え始めた頃、修行先の明道春風園の社長に、お願いして東京の花屋さんを見学した。

東京南青山では、赤地に白い文字で「花は、はなやか、Kフローリスト」この看板を見たとき都会の花屋の余りの鮮やかさに心が踊り、また、社長さんからは、このコピーは、林まりこさんが無名時代の作品であることを教えられ、そのセンスの良さに更に感動した。

また、ある日、職場の先輩に村松友規の「サイゴン・ティをもう一杯」という小説が面白いと教えてもらい読んでみた。

小説の主人公は花屋で、その店名は「はなみち」。何か強く惹かれるものがあり、これから開業する花屋のネーミングに凄い拘りと一生花の道を歩むと決めていた私は、店名を「花は・はなみち」にしようと思った。

花業界の表面は、最先端で華やかだけど、徒弟制度で難しい世界でもある。

親方は、弟子に技を教えない。見て覚えられない者は、花屋になれないと言われ、私は多くの技を盗んだ。

社長からは、三年修行しないと駄目だとの忠告を受けていたが、計歯通り一年後の昭和六十二年五月八日、母の日の前日、花の妖精たちに見守られながら、「感動」という武器をもって四十四歳で札幌山鼻に「花は・はなみち」を開店し、人生の勝負にでた。

この年は、忘れもしない美空ひばりの遺作となる名曲「みだれ髪」が収録された時期でもあり、間もなく平成になつた。

ポリシーは、花の生命力に託して生きる情熱を伝えたい。

「店を開く、運が開く」、そんな言葉は知っていたけど、本当にそうだった。

勇気をもって行動すれば人は応援してくれた。

一茎の花は無言で自己主張を繰り返しながら美しく咲き、散ってゆく、なんと潔いことであろうか。そんな潔さは武士道の精神に似たアッパレな生き方だと思う。

こんな潔さに魅せられ、花からは一時(ひととき)も離れることは出来なかった。

そんな日々の中、ある社長室を訪ねた私は額縁の中の「商人(あきんど)とは」の言葉に出会い、その前で釘づけになった。

「商人とは誰もが踏み込むことが出来なかった未踏の地に足を入れる事である。ましてや女、子供の通れる道ではない。それは、獣(けもの)みち」

都忘れ

頭の中で一匹の狼の遠吠えを開いた気がした。

平成十年項、バブル経済がガタガタと音をたてて崩壊していった。

「花は・はなみち」の経営は厳冬の大雪山から素足(はだし)で駆け下りるような厳しい毎日の連続であったが、寒さを感じる余裕はなく、いつも、山に生きる獣たちが私の背中を押してくれているようで必死に駆け抜け、やっと灯りの見える麓までたどり着けたような気がした。

世の中は、歌舞伎の回り舞台のように今までの常識や非常識がガラリと変わった。

セリ台から奈落の底に、自ら落ちていく人も沢山見てきた。

五十歳半ばの私は、迸る情熱と使命感に燃え、どんなハードルも越えられる判断力と馬力があったような気がする。

バブルが弾けても、暫くは人間のエネルギーが花よりも勝っていたと思う。

今は、どうであろうか、バイオテクノロジーの技術で花たちの進化は目をみはるばかりで、完全に花たちに主導権を握られ逆転されてしまった。

だが、ここで花たちに負けてはいられない。

私の人生は、一歳半で別れた父との二人同行遍路の旅だと思う。

三十七歳、志し半ばにして大東亜戦争で南方に散った父の無念を思うとき、「生きる」ことに起こる全ての事象を「美」と捉えることができた。

その父のお陰で何事においても強運であり、いつも明るく素直でいられた。

また、「櫂」や「寒椿」などで有名な小説家の宮尾登美子さんは戦時中、学生結婚し、夫は戦地に赴き自分は婚家で栄養も取れず肩身の狭い中、胸を患いながら小説を書くことで希望を見出し、病を治した。

その感動的な生き方が三十年来忘れられず、いつかは私も「文学」をとの思いが心の内で育っていたのだと思う。

数えきれない程の人の恩に感謝しつつ花の妖精たちと一緒に生きてこられた私の人生も集大成に入った。

黒子に徹する時がきた。

今、平成生まれの若く熱いエネルギーが、どんどんと世の中に出てきて、新しい社会を作り未来を切り開いていく。

そんな若者たちを応援したいと思う。

それなら「都忘れ」のように、ひっそりとでも人の心に語り掛けるような名脇役を演じ

てみたいと欲が出てきた。
また、今まで歩んだ人生の経験や仲間たちは私の宝物であり、これらに支えられている私に怖いものはなかった。
希望と目標が明確なら人は最後まで自分の意志で生きていける。
いまこそ、想像の翼を広げ自由に大空を飛び立ちたいと思う。
そして、命を紡ぐバトンに情熱という素晴らしい日本語を添えて次世代に渡す。
締め切りのない自分との約束を果たす、永遠の青春の始まりである。